

陳述書

令和6年 2月 6日

住所

氏名

- 1 私は、愛知県で会社員をしています。婚姻歴、出産歴はありません。
- 2 私は、幼いころから子どもを産むことに対して不安感を持っており、子を産むこと、母になることへの違和感、拒否感があります。
何か大きなきっかけとなる出来事があったわけではありませんが、その思いは変わることなく、年齢を重ねるにつれて徐々に確固たるものになっていきました。
今も妊娠することへの拒否感、恐怖感、「母」になりたくないという強い思いがあります。そのため、不妊手術を受けることを希望しています。
- 3 幼い頃から、私にとっては、一人きりでいることが何よりも大切なことでした。他者とかかわることが嫌いというわけではないのですが、私にとっては人一倍エネルギーが必要なことです。消費したエネルギーは、一人きりでいることでしか充電されません。家族とのかかわりも同様です。小学校のころは、自宅に帰る前に、誰もいないところで、一人きりで座ってぼーっとしてから帰宅していました。
一人きりでいることが大切なのは、4歳頃からで、今も同じです。これは私のアイデンティティだと思っています。
そのため、幼い頃から、どうしても自分が子どもを産んで養育していることを想像できないし、大人になったら一人暮らしをして、一人で生活していきたいと思っていました。子どもを産みたいと思ったことは、4歳から今まで一度もありません。
- 4 幼少期、私は、母から、私を妊娠・出産したときのことを聞きました。
私の母は、父と婚姻し、子を持たない夫婦であることを望んでいました。第一子である私を妊娠したときには、父と父の母（私にとっての祖母）に説得され、私を産むという選択をせざるを得なかったそうです。
母は、語学が堪能で、社会で活躍できる能力と気概を持っている人です。母にとって、

自ら積極的に希望せずに出産という選択をしたことは、キャリアに予期せぬブランクを与えたのではないか、と思います。もちろん、母は私を産んだことを今ではプラスのこととして捉えてくれています。ただ、出産をして子を持つことは、誰かに説得されて決めるものではなく、自分の意思だけで選べるものであるべきです。

しかし、当時の私は、母の経験を聞いて、私は、大人になったら一人暮らしをして一人で生活したいと思っていたけれど、大人になったら子どもを持つことを回避できないんだ、と、妊娠・出産に不安や恐怖を覚えるようになっていきました。

- 5 高校生になると、自由にインターネットが利用できるようになり、妊娠・中絶について調べるようになりました。

母が中絶を望んだのにできなかったことを考えると、中絶に対するハードルは高く、妊娠すること自体を回避できないのか、と、「絶対に妊娠しない方法」をずっと調べ続けていました。

しかし、絶対に妊娠しない方法は見つかりませんでした。日本では、子どもがいなければ卵管結紮の手術を受けることができないこと、子宮を摘出するのは命にかかわる病状がないとできないこと、子宮を摘出した人には排泄障害が出る場合があることなども知りました。

避妊のためにピルを利用するという選択肢もありますが、私にとっては、毎日薬を飲み続けることはできないと思い、1日でも飲み忘れれば避妊の効果はなくなるため、現実的な方法ではなく、妊娠への恐怖は変わりませんでした。

- 6 トイレで産んだ赤ちゃんを殺してしまっって逮捕されるニュースや、コインロッカーに赤ちゃんを遺棄してしまっって逮捕されるニュースなどを目にするようになり、さらに、妊娠への恐怖が高まっていきました。

避妊の方法も限られていて、中絶にもハードルがあり、出産をして育てられなかったら自分もそうになってしまうのではないかと、怒り得ることとして、他人事とは思えず、漠然とした妊娠への不安・恐怖はどんどん高まっていきました。

- 7 3年前頃、私は、避妊のために避妊インプラントを注射するという方法があることを始めて知りました。日本では一般的でなく、海外に行って施術を受けることを検討しました。しかし、コロナ禍であったこともあり海外渡航は断念しました。

同時期、ミレーナ（子宮内避妊システム）の利用を決意し、装着を始めました。子どもがいなくてもミレーナを入れてくれる病院を探すのにも苦労しました（私が探した市内では1件だけだったと思います。）。

ミレーナを入れて、ほぼ生理がなくなり、妊娠への恐怖もようやく軽減しました。生理がなくなったことによって、「自分の人生が返ってきた」と感じました。これからもずー

っとこの状態が続くことを心から望んでいます。改めて、私は子どもを産むことを望んでいないし、生理がない生活を送りたいんだと実感しました。

しかし、ミレーナの効果は最長5年で、効果が切れれば交換する必要があります。今後妊娠出産を希望しないのに、これを繰り返していくことは億劫に感じます。また、私はよい医者さんに当たったのでよかったです、ミレーナが外れてしまう人もいますそうです。

子どもがいないことでミレーナの施術を拒否されたり、ミレーナがうまく装着できずに外れてしまったりすることへの不安や恐怖はまだあります。また、いずれの方法も今後一切妊娠出産を希望せず、それから逃れたいのに、繰り返し費用や施術の負担を追っていくこととなります。

私は、そういう不安や負担からも解放されたくて、不妊手術を受けて、もう妊娠はしないという安心を得たいです。

- 8 私の恋愛対象は男性です。一人きりでいることが大切なので、父母がいて、子がいてという典型的な家庭像へのあこがれは全くありませんが、結婚については、してみたいな、と考えることもごく稀にあります。ただ、それでも妊娠・出産をしてみたいと思ったことは、4歳から現在まで一度もありません。

私にとっては、不妊手術を受けることができれば、どれほど気持ちが軽くなるだろうと思います。避妊のための負担を追うこともなく、生理の負担もなく、妊娠してしまうかもしれないとの精神的な恐怖からも逃れることができるからです。

しかし、不妊手術を受けるためには、配偶者の同意と多産の要件があります。実際、複数の医療機関に避妊手術を希望する旨の連絡をしましたが、「避妊目的」での不妊手術は対応できないという理由などでいずれも断られました。私は、日本では不妊手術を受けることはできないのです。

- 7 日本社会では、結婚して子どもを産むことが正しい選択であり、女性は、子を産み育てていくということが当然であるという考え方が根付いているように感じ、非常に息苦しく感じます。私のように子を持ちたくない、母になりたくないと思う女性もいます。しかし、それを口に出すことには相当の勇気が必要です。実際、私は、自分の思いを家族以外に伝えたことはあまりありません。

高校生の頃、こんなに妊娠したくない、と思う自分がおかしいのではないかと悩んだこともあります。しかし、大人になり、SNSで同じような考えの方たちが発信をしているのを知って、心強く、自分はおかしくなかったんだ、私のような人もいるんだと気持ちが軽くなりました。

自分の身体のことを決めるのは自分だけなのは当然のことです。例えば、宇宙に行ってみたいと思う人もいれば、行ってみたいと思う人がいるのと同じで、私は子どもを持

ちたくないと思っている、たったそれだけです。子どもを持ちたい人を否定しているわけではなく、自分にはできない、やりたくないと思っているだけです。

私は、誰にも干渉されず、誰にも説得されたりすることなく、自分の身体のことを決めたいだけです。妊娠出産は人生を大きく左右する選択であり、一人の人間の意思を尊重して、不妊手術にしても中絶にしても、第三者の介入なく自分の意思だけで決められるようになってほしいです。

以 上